神戸学院大学薬学部附属薬用植物園　**薬　草　園　だ　よ　り**　＊ Vol. 2018-2019 秋冬号（第10刊）＊

クローズアップ薬用植物（その11）：キキョウ（桔梗）

学名： *Platycodon grandiflorus*
和名： キキョウ（桔梗）
園内植栽場所： 8、12号圃、ほか

キキョウ科の多年生草本で、秋の七草にその名を連ねています。

草丈50-100cmほど。茎は直立して、上部で分岐します。

葉は4-7cmの狭卵形で、先端は尖り、縁には鋭い鋸歯があります。葉柄は殆どなく、一般に互生とされていますが、当園では茎の下部で三輪生、四輪生する株が散見されます。

キキョウ
<8号圃、2018.6.27 撮影>

キキョウの蕾（つぼみ）
<12号圃、2014.7.2 撮影>

花期は6月から9月頃で、茎頂に数個の青紫色の花をつけます。花径は4-5cm程で、花冠は五裂の広鐘形。

蕾（つぼみ）は、五つの花弁がぴたりとくっついたまま、風船がふくらむかのように大きくなり、淡緑色から青紫色に色づいて開花します。

学名（ラテン語）の属名と種小名は、*Platycodon*（キキョウ属）：「広い釣鐘」、*grandiflorus*：「大きな花の」との意味で、本種の特徴を良く表しています。

また英名では、風船のようなその蕾から「balloon flower」とも呼ばれています。

【植物の雄性先熟（ゆうせいせんじゅく）について】

キキョウは、雄性先熟の特徴を観察しやすい植物です。

植物における雄性先熟とは、一つの両性花（両性花序）が、同一個体の花粉の受粉（同花受粉≦自家受粉）を避けるための仕組みの一つで、花が咲くと初めに雄しべが成熟し、葯から花粉を放出。そして、花粉を出しきった後に雌しべが成熟することで、柱頭に個体以外の花粉を受け取る（他家受粉）可能性を高めているのです。

では、キキョウの「しべ」の拡大写真で、雄性先熟の過程を観てみましょう。

左から順に（同一個体のものではありませんが）、
① 開花後、雌しべを包み込む5本の雄しべ。葯から花粉の放出が始まっています。
② 雄しべが開いて（倒れて）雌しべから離れ、花粉の放出もなくなりましたが、まだ雌しべの周囲（葉粉毛が生えています）には花粉が付着しています。
③ 雌しべの成熟が進むにつれ、周囲に付着していた花粉もなくなってきました。
④ 雌しべが完全に成熟、柱頭が五つに裂けて、受粉可能な状態になりました。

いかがでしょうか。雄しべと雌しべの成熟時期のズレを感じてもらえましたか。

※ 両性花には雌雄同熟、また雄性先熟とは逆の雌性先熟もあります。

果実は側卵形の蒴果、熟すと上端が裂開します。

中に黒色の種子が多数入っています。

次に、生薬の薬用部位となる「根」の写真です。

春先、植替え作業の途中で撮影したもの（2018.3.27 撮影）なので、上部に新芽が伸び始めています。

生薬の性状に、「本品は僅かににおいがあり、味は初めなく、後にえぐくて苦い。」と記載されています。

今から思えば、えぐ味と苦味をその機会に味わっておけば良かったですね（笑）。

キキョウの根

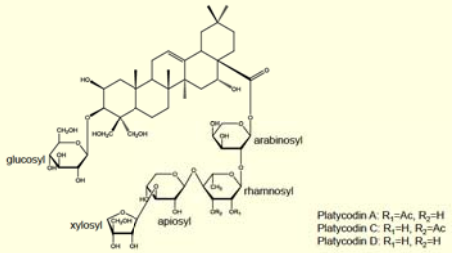
生薬の基原植物として

キキョウの根は、生薬「キキョウ（桔梗根）」として、日本薬局方に収載されています。

生薬「キキョウ（Platycodi Radix、桔梗根）」について

【主要化学成分】

オレアナン型トリテルペンサポニン（プラチコジンA、C、Dなど）



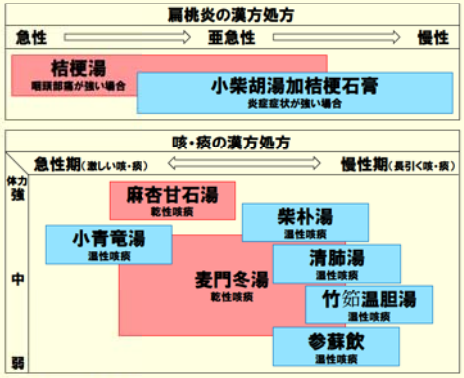
【用途】

鎮咳去痰、排膿作用があり、扁桃炎、咽喉痛に用いる。

【漢方処方】

耳鼻咽喉科領域、特に喉の痛み、咳や痰の改善を目的とした漢方処方の中には桔梗が配合されたものが多くみられます。代表処方として、桔梗と甘草の2味からなる桔梗湯があり、扁桃炎や咽頭炎などで、のどが腫れて発赤し、痛みをともなうときに用いられます。また、炎症が強く現れている場合は、石膏と桔梗の組合せが良く、その処方例として、小柴胡湯加桔梗石膏があります。

その他、咳、痰の改善を目的とし、桔梗が配合された漢方処方として、参蘇飲、清肺湯、竹筎温胆湯があります。



清肺湯　（麦門冬、天門冬、桔梗、陳皮、杏仁、貝母、桑白皮、竹筎、黄芩、山梔子、当帰、五味子、茯苓、大棗、生姜、甘草）
竹筎温胆湯　（竹筎、麦門冬、桔梗、陳皮、枳実、半夏、柴胡、黄連、香附子、人参、茯苓、生姜、甘草）
参蘇飲　（人参、蘇葉、桔梗、陳皮、枳実、半夏、葛根、前胡、茯苓、大棗、生姜、甘草）

上記3種の漢方処方はいずれも、こじらせた風邪で、特に咳・痰の改善に用いられるものであります。共通して、鎮咳去痰作用が期待される桔梗、陳皮が配合されています。また、体力中程度以下に適応される処方には滋養強壮が期待される人参が配合されています。

フジバカマ（藤袴）と アサギマダラ（浅葱斑）

学名： *Eupatorium japonicum*
和名： フジバカマ（藤袴）

<50号圃、2018.9.27 撮影>

<50号圃、2018.10.12 撮影>

キク科ヒヨドリバナ属の多年生草本で、左欄で紹介したキキョウ（桔梗）と共に、秋の七草の一つに数えられています。

秋の気配が訪れる頃、茎の先端に散房花序をつくり、頭花を多数つけます。頭花は淡紫色の管状花からなり、二裂した細長い花柱がもじゃもじゃと花筒から伸び出る（花弁に見える!?）姿が特徴的です。

和名は、花色がフジ（藤）の花に似て、個々の管状花の形が袴（かはま）のように見えることからのようです。

全草を乾燥したものは生薬「ランソウ（蘭草）」、中医学では「ハイラン（佩蘭）」とされ、また日本でも古くから香草として様々に利用されてきました。

万葉の昔から親しまれてきた植物ですが、自生に適した河川敷などの環境変化に伴って、今日では絶滅が危惧される状況となっています。

当園の植栽種（写真）も、園芸品種で、厳密には日本在来のものとは別種と見なされるものです。・・・残念。

学名： *Parantica sita*
和名： アサギマダラ（浅葱斑）

タテハチョウ科マダラチョウ亜科の大型チョウ。海を越える渡り蝶として有名です。濃茶色地に青白い斑紋があり、斑紋部分は半透明。胴体も黒地に白のまだら模様になっています。

一株だけのフジバカマに、多い日には20頭以上のアサギマダラが吸蜜に訪れていました。

飛翔が緩慢で、人影にも怯えず、周辺を優雅にひらひらと飛び回る様を見ると人気の高さにも納得です。

飛来した中には、移動観察用のマーキング（標識）が施された個体も観られましたが・・・。

秋　の　七　草

山上憶良（やまのうえのおくら）が「万葉集」で続けて詠んだ歌、
「秋の野に 咲きたる花を 指折り かき数ふれば 七種の花（巻八1537番）」、
「秋の花 尾花葛花 瞿麦の花 女郎花 また藤袴 朝貌の花（巻八1538番）」、
の二首が、そもそも「秋の七草」の始まりのようです。

萩の花（はぎのはな）　＝　ハギ（萩）
尾花（をばな）　＝　ススキ（薄、芒）
葛花（くずはな）　＝　クズ（葛）
瞿麦の花（なでしこのはな）　＝　ナデシコ（撫子）
女郎花（をみなへし）　＝　オミナエシ（女郎花）
藤袴（ふぢはかま）　＝　フジバカマ（藤袴）
朝貌の花（あさがほのはな）　＝　キキョウ（桔梗）、この解釈には諸説あるようです。

「春の七草」は、七草粥として食することで、滋養摂取に用いられてきましたが、「秋の七草」は、その花を愛で、慈しんだ歌が起源の風流なものなのです。

学名： *Patrinia scabiosaefolia*
和名： オミナエシ（女郎花）

根のついた全草は、生薬「ハイショウ（敗醤）」として神農本草経に収載あり。

学名： *Miscanthus sinensis*
和名： ススキ（薄、芒）

「尾花（おばな）」は、ススキの穂を動物の尾に見立てたススキの古称です。

学名： *Dianthus superbus* var. *longicalycinus*
和名： カワラナデシコ（河原撫子）

ナデシコ（撫子）は、ナデシコ属の総称。又は、カワラナデシコ（河原撫子）の異名。

学名： *Pueraria lobata*
和名： クズ（葛）

周皮を除いた根は、生薬「カッコン（葛根）」として日本薬局方に収載あり。

学名： *Lespedeza bicolor*
和名： ヤマハギ（山萩）

ハギ（萩）は、マメ科ハギ属の総称です。他に、ミヤギノハギ（宮城野萩）など。

本欄には、キキョウ（桔梗）とフジバカマ（藤袴）を除く5種のみ掲載しています。

【 マメ知識 ：「秋の七草」の覚え方 】

お好きな服は（おすきなふくは）？

お ＝ オミナエシ（女郎花）
す ＝ ススキ（薄、芒）
き ＝ キキョウ（桔梗）
な ＝ ナデシコ（撫子）
ふ ＝ フジバカマ（藤袴）
く ＝ クズ（葛）
は ＝ ハギ（萩）

の語呂合わせで覚えてくださいね！

編　集　後　記

薬草園だより（第10刊）はいかがでしたでしょうか。諸事情あるものの、先ず以て前号から随分と間の空いた発刊になりましたことをお詫び申し上げます。

さて今回は、上欄にてご紹介した「フジバカマ（藤袴）」にまつわるお話。

当初は標本園内で育てていたのですが、環境が合わなかったのでしょう。いくら世話をしても勢いは衰え、株数も年々減るばかりの状態でした。

このままでは絶えてしまうと判断。一株を鉢に採り、一年間の養生後、育成環境に合いそうな50号圃へと今春植え替えたものが今回登場した一株です。

結果は大成功。草丈は100cm未満から一気に150cm以上に、花つきも良好、新たな茎葉も元気よく伸びる伸びるはの変わり様。変貌ぶりに驚きました。

でもこれは、特別なことでなく、植物の育成栽培ではよくあることです。育成環境がいかに大切かを思い知らされる事例です。

人にとっての育成（生育）環境も同様なのではないでしょうか。人の場合、意識やしがらみなどがあり、自ら行動できる分だけより複雑だとは思いますが・・・。

縁あって本学薬学部に在籍されている学生の皆さんが、自分に適した育成環境を、自らの意志と行動で切り開かれんことを、草葉の陰、否、薬草の傍らより（笑）念じております。

本紙に対するご意見・ご感想、記載内容の誤り等のご指摘がございましたら、お手数ですが下記連絡先までお願いします。

有瀬キャンパス内
薬用植物園　美甘康仁（内線：27902）
E-mail: mikamo@pharm.kobegakuin.ac.jp